

モンゴルとチベット仏教

モンゴル帝国というと、チベットの高僧パクパがモンゴル皇帝フビライの師として仏教を広めたことがよく知られています。この関係は時代が下った後もなぞられて、モンゴル人や満洲人がチベット仏教の施主としての役割を果たしたということです。(このことは一面では、中世のモンゴル帝国というものが後世にいかに大きな影響を与えたかということでもあると思います)

だいたい、ダライ・ラマという称号自体、16世紀にモンゴルのアルタン・ハーンから贈られたものということからも、チベットとモンゴルの関係の深さがうかがえます。

面白いのは満洲人の清朝の時代です。満洲人はモンゴル人を同盟相手に選び、清朝が昔のモンゴル帝国を継承することを示すためにチベット仏教の施主としてふるまって権威づけをしたというのです。ダライ・ラマをトップとするチベット仏教はチベットのみならずモンゴルや満洲といった広い地域にわたって影響力を持っていたということです。ダライ・ラマに対して不敬だということが戦争の口実になったり、ダライ・ラマ6世の後継者の正統性をめぐって清朝とジュンガルが戦ったりするくらいなので、その権威たるや絶大です。

もともと、馬に乗って戦う満洲人やモンゴル人のスタイルでは戦争に勝てない時代になると状況が変わります。20世紀になって社会主義勢力がモンゴルを覆うと、仏教寺院は破壊されて悲惨な時代に入ります(一面では、迫害された僧侶が亡命先のアメリカなど西洋に仏教を紹介する機会ともなるのですが...). 社会主義政権が崩壊した現在ではモンゴルでは一応自由に宗教活動ができますが、仏教が抑圧された期間が80年くらいと長きに渡ったために復興もなかなか大変だそうです。

以上は、<http://yanok.net/2009/12/post-31.html> による。

註：アルタン・ハーン（1507年 - 1582年）は、モンゴルを支配したハーン。ダヤン・ハーンの孫（在位：1551年 - 1582年）。

ダヤン・ハーンはモンゴル中興の祖として称賛されており、モンゴルの諸王公はチンギス・カン(太祖テムジン)、セチェン・カーン(世祖クビライ)に次ぐ偉人としてダヤン・ハーンを位置づけている。現在のモンゴル国における「チンギス・カンの末裔」は大部分がダヤン・ハーンの流れをくんでいる。

ダヤン・ハーンの父親・バヤン・モンケ・ボルフ（1464年 - 1487年）は、モンゴルの第33代（[北元](#)としては第19代）大ハーン（在位：1480年 - 1487年）。

ガンダン寺

<http://visit2mongolia.mn/ja/j/destination/%E3%82%AC%E3%83%B3%E3%83%80%E3%83%B3%E5%AF%BA%E9%99%A2>

ガンダン寺はモンゴル最大規模の重要仏教寺院です。5000人にも及ぶ僧侶を擁し、仏教教義を学び実践する教育施設ともなっています。ガンダン寺で最も人気のある仏像は、26.5メートルの高さを誇る立仏・グジェド・ジャンライシグ観音像で、その観音堂には多くの人が参拝に訪れます。初代の仏像は1911年に建立され、悲しい事に1938年に共産主義者の手により破壊(廃仏毀釈)されました。しかしその後、1996年再建の機運が高まり、多くのモンゴル人篤志による寄付金が寄せられ、再び建立されました。首都西方のエルデネツト鉱山産出の銅を使用し、金箔仕立ての極めて美しい二代目仏像として蘇ったのでした。

ガンダン寺では、チベット仏教の特徴である五体投地やマニ車を回す人の姿を見受ける。





